

保育のヒント～「科学する心」を育てる～

見とる／認定こども園 常磐会短期大学附属常磐会幼稚園

保育者が「面白そう！毎日楽しんでいる！」と見守る遊び。よく観ると遊び方や子どもの姿は日々刻々と変わり、体験している内容も変わっています。その姿を捉えて「子どもの実態→環境の工夫を図る→エピソードを記録→考察」と記述した貴重な保育記録は、どのように活かしていますか？今回は、見とることを大切に「見とりメモ」という園独自の工夫をすることにより、子どもの変容や言動を捉えることや、園で共有したりすることに繋がった4歳児の事例をご紹介します。



● 見とりメモ－泥遊び－／4歳児

気候も暖かくなり、砂場で裸足になって、泥んこ遊びをしたり、川を作って水を流して遊んだりして、感触のある遊びを楽しむようになるこの時期だが、梅雨に入り、砂場は戸外であるために遊ぶことが叶わない時もある。そこで、室内での遊びであっても感触を楽しむ遊べる活動を取り入れていく計画を立てる。遊びの中で感触を楽しんでいる子どもたちの姿を捉え、感触や遊びの広がりを考えて、土粘土を準備することにした。

✦ 事例1：初めての土粘土（6月中旬）

● 環境づくりのポイント

砂場でも感触を楽しんでいた子どもたちの姿を受けて、土粘土ならではの感触を味わえるように、保育者が粘土の水分を少し多めに柔らかくこねて準備しておく。

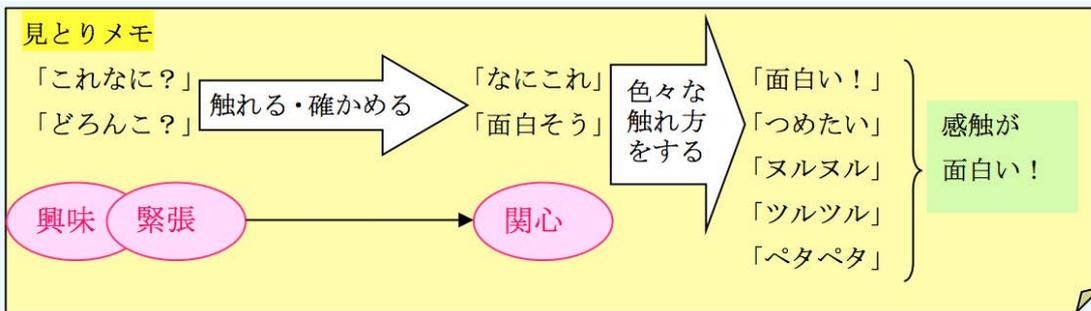
● 子どもたちの様子

土粘土に初めて触れる子どもたち。「これ何？」「なんか茶色いなー」「泥んこ？」と言いながら土粘土に触る。ツツツと指で突いたり、グングニと指で押したりして、初めは慎重に触れようとする。徐々に大胆に触ったり、グシャッと手で掴んだりして、素材の感触を確かめるようにして遊ぶ子どもたち。粘土をわし掴みにすると指の間からニュルリと出てくる様子に「きゃー！面白い！」と声を上げて面白がる。友達の歓喜の声に気付いた他の子どもたちは「なににな？」「ほくもやりたい！」と集まってきた。「粘土冷たーい！気持ちいい！」「ヌルヌルしてる」「ここはツルツル！」「ペタペタするー」と言いながら遊ぶ姿が見られた。



● 考察

茶色い塊に「これなに？」と興味を示しながらも、初めて見るもの、触れるものであることから、少し緊張しながら慎重に粘土に触れようとする姿がある。自分のペースで少しずつ素材に触れて感触を確かめながら、次第に土粘土に関心を寄せ面白がる気持ちが高まっているのを感じる。「粘土冷たーい！気持ちいい！」「ヌルヌルしてる」「ここはツルツル！」「ペタペタするー」など、触った感触を言葉にして表現し喜んでいることから、粘土のいろいろな感触を積極的に楽しんでいると考えられる。



✦ 事例 2 : 「水の力やな！」 (3日後)

● 環境づくりのポイント

土粘土の感触を気に入り遊ぶ姿がある。粘土の硬さを調節し、昨日の楽しさが継続するように、繰り返し感触を味わって遊べるようにしておく。

● 子どもたちの様子

進んで土粘土で遊ぶようになる姿が見られる。あるとき、手に付いた泥を落とす為の水に手を付ける。濡れた手のまま再び土粘土を触りだした。「うわっ！溶けてきた！」水が土粘土を溶かし、ドロドロになっていく様子を面白がっている。「水かけてみよ！」と水をかける。水に溶ける土粘土の変化を確かめながら、何度も水を手で汲んで土粘土にかけて遊ぶ。土粘土がそう多くない量であったこともあり、水をかけているうちにドロドロになって、さらに水分の多い水っぽい状態になる。溶ける様子を面白がり、繰り返し遊んでいた子どもたち。次第に土粘土が溶けてなくなり「シャバシャバヤー！！」と言う。保育者がその様子を共有して、これまでにない感触に気付いた子どもの様子を捉え、「どうしてシャバシャバになったの？」と尋ねると「水かけたから！」「水の力やな！」「すごいな！」と答えた。泥んこトレイの上で手を滑らせて「ツルツルー」「スケートみたい！」と言って、楽しそうに遊んでいた。



● 考察

粘土が水に溶ける”という偶然の発見をきっかけに、そのことを面白がり「もう一回！」と何度も繰り返す姿がある。繰り返し遊び、土粘土が水っぽくなりほとんど無くなった時は「シャバシャバになった」と、これまでにない感触の発見を面白がっている。また、その感触は水によってもたらされたものであるということに気付き「水の力やな」「すごいな！」と感動する子どもの姿もある。“粘土が水に溶ける”ことを発見したことによって「もっともっと溶かしてみたい！」という、積極的な活動の動機となり活動に目的が生まれ、土粘土が溶けて無くなるまで根気よく、熱中して遊ぶことができた。

